2012/11/08

TWS hongo

第7回展覧会企画公募（受賞企画展覧会）

Emerging Artist Support Program 2012

2012/12/1 土 - 2013/1/14 月・祝 トーキョーワンダーサイト本郷

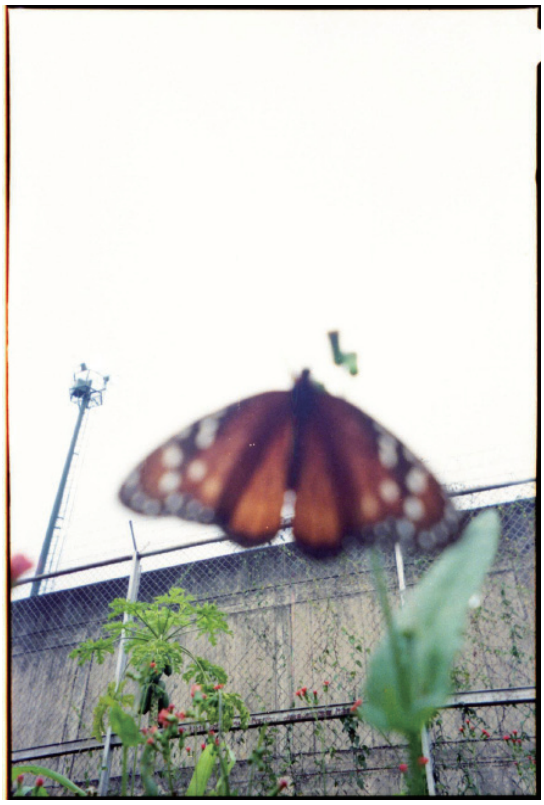
選出企画

1F 企画：ミラク・ジャマール＆ニーン・山本-マッソン | Mirak Jamal & Nine Yamamoto-Masson | upDate 2011111111111s

2F 企画：エレナ・アコスタ | Helena Acosta | Lleca(ジャカ) から cohue(コゥエ) へ ー刑務所からのフォトグラフィー

企画：高橋夏菜 | Kana Takahashi | TOC [toasters city / country / cosmos] ※奨励賞（キュレーション・ゼミ選出）

3F 企画：吉澤博之 | Hiroyuki Yoshizawa | But Fresh



エレナ・アコスタ企画
「Lleca(ジャカ) から cohue(コゥエ) へ ー刑務所からのフォトグラフィー」
刑務所でのワークショップにて囚人たちにより撮影された写真　2011

エレナ・アコスタ企画「Lleca(ジャカ) から cohue(コゥエ) へ ー刑務所からのフォトグラフィー」ビオレット・プール撮影　2011

吉澤博之 企画「But Fresh」泉太郎《マグモド》2002、DVD 7 分

取材・掲載の際は、事前に広報担当までご連絡をお願いします | 担当：浅野・千賀 | TEL:03-5766-3732 / E-MAIL: press@tokyo-ws.org

企画概要

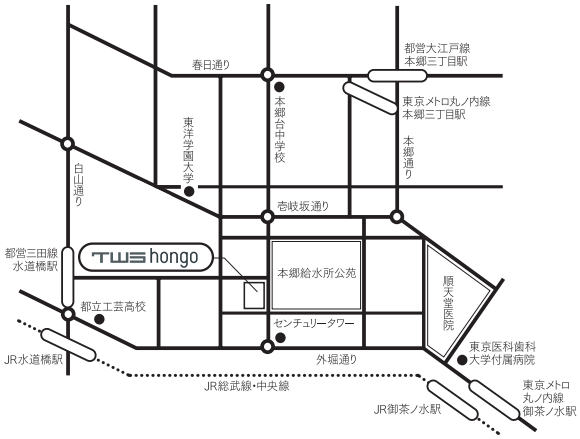
展覧会の企画を志し活動している若手への支援・育成を目的とし、展覧会企画そのものを公募するプログラム「展覧会企画公募」。選出された企画はTWSが支援し、TWS本郷にて展覧会を実施する機会を得ます。
今、私たちは大きな転換期を迎え、文化芸術やアートの担い手としてのミッション、展覧会を開催する意味…これまで当然とされ省みることの無かった、あらゆる事象を根本から再考する局面に立っています。多様性を帯び流動的なグローバル社会では、価値基準や情報への関わり方も変容し、改めて「キュレーション」という行為やそれにまつわる思考が見直されています。また、芸術作品をモノとしてではなく、活動そのものやプロセスをアートとして提示し、リアリティを追求する動きも顕著に見受けられます。
新しい表現の可能性のみならず、展覧会という表現の場をとおしていかに社会へコミットし、新たな協働の地平を開いていけるか。 TWSは、これまでの「展覧会」という枠組みを再考し、積極的に展覧会とはどのような場であるかをともに考え、試行していく企画を募集しました。第7回目を迎えた2012年度は、《キュレーションとは何か?》をテーマに、3企画を選出、さらに6月に開催したキュレーション・ゼミから1企画を奨励賞として選出しました。

開催概要

■会期	2012年12月1日（土）～2013年1月14日（月・祝）
■会場	トーキョーワンダーサイト本郷
■開館時間	11:00～19:00（最終入場は30分前まで）※開・閉館時間はやむを得ず変更される場合がございます。予めご了承ください。
■休館日	月曜日（祝日の場合は翌火曜日）、2012年12月29日（土）～2013年1月4日（金）
■入場料	無料
■オープニング・レセプション	2012年12月1日（土） 17:00～19:00
■主催	公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

会場案内

トーキョーワンダーサイト本郷
〒113-0033 東京都文京区本郷2-4-16
TEL: 03-5689-5331
FAX: 03-5689-7501
■交通案内：御茶ノ水駅・水道橋駅（JR総武線）、
水道橋駅（都営地下鉄三田線）、
御茶ノ水駅・本郷三丁目駅（東京メトロ丸ノ内線）、
本郷三丁目駅（都営地下鉄大江戸線）各駅より徒歩7分
駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮下さい。



2012年度審査員講評

国内と海外の間の企画の質の差が気になった。概して国内の応募は、個人的な関心事から企画が立てられているものが多く、現在のアートの文脈やそれを取り巻く社会や政治、経済に対する意識はほとんど見られなかったのは残念である。海外の応募企画は高い水準のものが多く、問題が共有されている企画が多かったが、国内の応募とは逆にもっと固有のローカリティを意識して欲しいと感じた。
その中で選出された企画は、しっかりとした問題意識とヴィジョンを持ったものである。海外応募の二人は、きわめて現在的な問題意識の中で企画が練られており、アートの現在形を示すものとして興味深い。国内の応募は、キュレーションの意図のはっきりとした野心的な試みである。特に今年設けられたゼミ選出枠の企画は、プレゼンまでの間にはっきりとした進化が見られたものだ。いずれも試行錯誤の上で最終的にどういう形になるのか今から楽しみだ。

毛利嘉孝（社会学者、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授）

展覧会そのものよりも、トークやワークショップなど、かつては関連イヴェントと捉えられていたような要素が、展示と対等な意味を持ち始めている今日、「キュレーション」という言葉を、どれだけ積極的に柔軟に解釈できるかということが気になっていたが、やはりどうも、どちらかというと静的なものとしてそれを捉えようという意識が強かったのかもしれない。また、海外からの応募の多くが、応募資料の文法をクリアしていたのに対して、国内からの応募の多くは、そうした教育の不足を示していたことが気にかかる。加えて、社会・政治的な問題に対しても、あきらかに国内からの応募にはその気配が希薄で、アートの内部に自閉するかのような姿勢も気になった。入選したものについても、それらの問題をパスしているというよりは、そうした問題には他の企画同様、拘泥しつつも、けれどもどこか見過ごせない要素を手にしていたという点が評価された。

杉田 敦（美術評論家、女子美術大学教授）

応募企画、特に国内の応募者に関しては企画者自身の個人的興味だけに内容が引っ張られていて、「今、どうしてこの企画なのか」という客観的な視点が希薄だったことと、実際の社会や観客に対して展覧会を通してコミットしようとする意識の低さが気になった。
入選企画は企画実現のプロセスの中での体験を通して感じたことを展覧会に反映しようとする態度がうかがえ、企画者自身が成長する可能性を感じた。公募という制度の魅力が薄れているからだろうか、それとも主催者に気を使うことなくセルフプロデュースの展覧会をする方が楽だからだろうか、キュレーター志望者の応募が少ないが、キュレーターの仕事に関しては、展覧会を実際に開催してみることでしか経験値を得ることができない。会場や予算をサポートしてくれるこのような公募にキュレーター志望者からのより積極的な参加を望む。

高橋瑞木（水戸芸術館現代美術センター 主任学芸員）

昨年度の展覧会企画公募は、3.11後、大きな転換期として、文化芸術の役割や意味を再考し、≪いま、本当に必要とされる「場」や「実験」とは何か?≫≪公共の場で行う展覧会とはどうあるべきか?≫を改めて問う事が課題となり、選考された企画は、各々展覧会の場を拡張し、社会へコミットする事が試みられた。この事を前提に、本年は「キュレーションとは何か」を課題としたが、応募企画は、昨年以前に後退した感がある。キュレーションを既成の狭い枠内で企画されたものが多く、ダイナミックな展開は、選考された企画含めて試みられているとは言い難い。それでも海外からの応募は、あるキュレーションの作法に則った企画書となっていたが、日本からの企画は、一発芸的なものが多く、今後継続するポテンシャルを受け取れず、この公募を始めて以来、解決されずに続く現状を再認識する事となった。アート作品という情報を集めるのではなく、プロジェクトそのものを立ち上げながら、社会への対話と試行となる企画を待っています。

家村佳代子（TWSプログラム・ディレクター）

ミラク・ジャマール＆ニーン・山本-マッソン | Mirak Jamal & Nine Yamamoto-Masson | upDate 2011111111111s

ミラク・ジャマール＆ニーン・山本-マッソン
≪ジェスチャー≫ 2012、HDビデオ

ティビ・ティビ・ニュースピール
≪Les Evénements≫ 2012、ミクスト・メディア

企画概要

早くも2012年現在。2011年の私たちをとりまく環境から得たものは、複雑さと「今」の解消されない忘却の彼方へと分散してしまった。「2011年」の遍在が持続している中、その幻を今ここに引き込むような視点が求められている。アラブの春や日本の一連の災害、ウィキリークスなどの事件の後、2011年初めにミラク・ジャマールとニーン・山本-マッソンが初めてアーティストたちに呼びかけ、並外れたメディア・ダイナミックスという環境からうまれた作品を提示した。その一年後に発表された、ほとんどが新作であった作品の一部は、枠組み（一年あるいは特定のある出来事を暴露し、また反映され、記録するという課題）との具体的な関係性の中で位置づけられる。そのような意味でこの展覧会は、出来事をどのように代弁するかという問題を提起するメディア→作品間の非同時性を念頭に置いている。

2011111111111s は「トゥー・サウザンド・イレブンズ」と発音する。複数の視点から捉えたその年の多くの大事件や無数のやりとりから着想を得た、「2011年」をテーマにした展覧会である。その一年主要な見出しを占めていた騒ぎは、主流メディアとソーシャルネットワークの多様な経路を通じて伝達されてきた。一つのスペース という制約の中で、そしてニュース記事の寿命とは対照的に、この展覧会に集まっている作品は、その年のリアルあるいはヴァーチャルな体験、直接的あるいは 遠くの現実を表す反応を誘発しようとしている。そこで2011という年の断片が映し出され、進行役（アーティスト）の視線がオブジェやメディア作品という形式に凝縮して現れる。作品たちは、過ぎ去った時代と私たちのやり直しの効く現在を結びつけるための（再）発見を呼びさます引き金となるだろう。

企画者プロフィール

ミラク・ジャマールは、イランで生まれた後、旧ソビエト連邦、ドイツ、アメリカ、カナダで育ち、現在はベルリンを拠点に活動するアーティスト。ニーン・山本-マッソンは、フランス人と日本人のハーフで、ベルリンを拠点に活動するキュレーター、アーティスト。現在はアムステルダム大学文化分析学科の修士課程に在籍し、メディア研究、批評理論を学ぶ。

参加アーティスト

ティビ・ティビ・ニュースピール、メラニー・ボナヨ、ゲオルグ・ラインハルド、ベニ・ワーグナー、ミラク・ジャマール&ニーン・山本-マッソン、ジャスティン・ウィリアムズ、ニコ・プリンセン、南條俊輔＝フランソワ、岩間朝子

エレナ・アコスタ | Helena Acosta | Lleca(ジャカ)からcohue(コゥエ)へ　ー刑務所からのフォトグラフィー

ビオレット・ブール
≪Lleca(ジャカ)からcohue(コゥエ)へ ー刑務所からのフォトグラフィー≫

刑務所でのワークショップにて囚人たちにより撮影された写真　2011

刑務所でのワークショップにて囚人たちにより撮影された写真　2011

企画概要

「刑務所の中に入らなければ、その国家の本質を知ることは誰にもできないと言われる。国家は最上流ではなく最下級の国民の扱い方で判断すべきである。」　ネルソン・マンデラ

「Lleca(ジャカ)からcohue(コゥエ)へ ー刑務所からのフォトグラフィー」という本展のタイトルは、ベネエラの囚人が使うスラングから付けられた。「Llecaからcohueへ」とは、「ストリートから懲罰房へ」という意味。ベネズエラ人写真家のビオレット・ブールが、2年間以上に渡りベネズエラの5つの刑務所で実践してきた教育プログラムの成果を紹介する。自由や社会的変質、職業といったものを表現する手段としての写真を、変えていこうとする考えからこのプロジェクトの駆動軸が動き出した。企画の特徴である参加型であり多元的なアプローチは写真行為の前での囚人の個人、または集団行動の観察と調査を意図している。この文脈において、写真は視覚伝達のための、そして被写体の象徴的現実を表現するためのツールとなりうる。

また、ベネズエラの刑務所制度におけるこの写真ワークショップのような取り組みを伝えることで、社会貢献につなげ、さらに発展させることも本展の目標の一つとなっている。ベネズエラ写真史上初の試みであるこのプロジェクト。最終的には、囚人たちがより人間らしい適切な生活を送るための教育プログラムの樹立を目指している。

企画者プロフィール

1981年生まれ。アート・キュレーター。国立ロス・アンデス大学卒業（メリダ州、ベネズエラ）。現代における芸術表現の普及について、主に社会問題とその技術文化への関わりに焦点をあててリサーチしている。

参加アーティスト　ビオレット・ブール

吉澤博之 | Hiroyuki Yoshizawa | But Fresh

タニシ K《横浜への道》2001、パフォーマンス、東急東横線

企画概要

「処女作には、その小説家のすべての資質が含まれている」
文芸の世界では頻繁に言われることです。作家のデビュー作にも同じことが指摘できるのではないでしょうか。またミュージシャンが自身の楽曲を録音しなおすセルフカバーには、個々の姿勢が明確に出ます。作家が過去の作品を現在の視点から作り直すとき、何を感じ、作品をどう変えるのか、変えないのか。どちらにせよリアルな感情の振幅が作品に表現されるのではないでしょうか。
本展ではコンセプチュアル・アート、フルクサス、ハイレッド・センターなど美術史の系譜を受け継ぎ、主にパフォーマンスや映像、インスタレーションといった手法で表現活動をしている作家6名に各自のデビュー作品を2012年バージョンとしてリメイクしてもらいます。作品の表面ではなく、出発点つまり作家の内奥に潜む意思に焦点を当てることで、表現欲求の根本を作家、企画者、鑑賞者で発見する機会にし、本展が2010年代のアートの呼び水となることを狙います。

企画者プロフィール

1980年栃木県生まれ。展覧会「ソーシャルダイブ　探検する想像」(3331 Arts Chiyoda、東京、2011年)企画。SNOW Contemporary インターンスタッフとして飯沼英樹個展「美女」、ジャンボスズキ個展「愛の風景」(ともに2011年)、竹内公太個展「公然の秘密」、SWOON 個展「Honeycomb」(ともに2012年)に関わる。

参加アーティスト

泉 太郎、開発好明、タニシK、丹羽良徳、眞島竜男、和田昌宏

高橋夏菜 | Kana Takahashi | TOC [toasters city / country / cosmos]　※奨励賞（キュレーション・ゼミ選出）

市村香織《TOC》2012、インスタレーション
制作居力：三分一穂波

企画概要

アーティストとキュレーターの関係性は、日常と非日常の間柄に似ているように思います。
本展で扱う作家・市村香織は、トースターと共に東京の街中を行動するインスタレーション《TOC》によって、非日常の光景を作り出そうとします。しかし、その行為は継続するほどに、彼女にとっての日常的な行動へと変化し、制作過程で非日常性は薄れていくのではないでしょうか。一方、キュレーションとしてのやり取りの中で生じたはずの関係性や言葉は、ひとつの作品として扱われ、展示されています。
時に関係性が反転する曖昧な二者が組合わさった時、その間に境界線を引くことの能否や、そもそも境界線は存在するのか、という問いが立てられるのではないかと考えています。

企画者プロフィール

1989 年秋田県生まれ。女子美術大学大学院美術研究科在籍。これまでの企画に「松原香織個展 Self-Globalization」(女子美アートセンター準備室、2012 年)がある。本企画で作家・市村香織と組む。

参加アーティスト　市村香織